

海

流

かきりゆき
50号・2005冬



花の終わるまで

宮本 泰子

父は大輪の花のように輝いていた
激痛で緊急入院した時

余命一週間と告げられた

母は付きつきりで看護に当たった

「お父さんが治るまで我慢してね」

十一歳と八歳の姉弟が残された

父方の祖母が手伝いに来てくれた

初めて過ごす両親のいない家

夜は寂しい 両親に会いたい

隣のおじさんが「あんた等が

お父さん お母さんに会いたいように

お父さんもおばあちゃんに
会いたんだよ」と言った

部活を休みがちになった娘に

先生が「そんなに休んだら

レギュラーに出来ないよ」と言った

父の事を作文に書いた

涙が止まらなかった

学校から帰ると病院へ急ぐ

個室には豪華な見舞いの花が

飾られてあった

「今日はお父さんの好きな

炊き込みご飯だよ」

「食べて見ようか」

母に一口食べさせて貰って
「美味しい」と微笑んだ

父との永遠の別れが迫って
いるとも知らずに

漫画本を読み耽る弟

この子等を残して逝く宿命に

父は萎むまいと頑張っている

腫れた手足を揉む娘は

父から発信される思いを

しっかりと受け止めた

「もういい」と言われて

揉むのをやめた娘は

傍らの萎みかけた花を

そっと取り除いた

私と詩

宮本 泰子

私が詩を書き始めたのは、二男に先立たれて呆然
としている時、何か書いて見たらと言われて短文を
書いて見た。書くことよって気持ちが救われた。
それまでは文章を書くのは手紙くらいだった。

詩というものは、どう書いたら良いかと長男に聞
いてみた。兎に角、削って行って読む人に想像させ
る処を残したら良いと言われた。手探りで出来た詩
を高新文芸に投稿するようになり佳作に入ると嬉し
かった。

詩人に見て貰うと散文だと言われた。散文は詩で
はないと言う人と散文も詩だと言う意見がある。詩
人の詩を読んでも理解出来ないのが多い。ルース

は「叙情詩は狂気である」と書いているが私には分か
らない。

海流に入会を勧められた時、一度は断った。肩書き
のない未熟な私が仲間入りして海流のレベルを下げる
のではないかと心配だった。息子が入るなら応援する
と言ってくれたので36号から入会する事にした。

会員の方達の思いやりにふれ感謝している。私に詩
は生活詩が多い。県外にいる兄が「お前の詩を読むと
故郷の様子が良く分かる」と言ってくれる。

詩は見えない物を観ると言う。

読む人に心地良い感動を与える様な詩が書けたら良
いなと思っている。

海流50号を迎えるに当たって、これからも会員の方
達に助けられ続けて行けたら幸せだと思います。

テロ&戦争

森 公宏

人は生まれてくるときは個々なのに
死ぬときは一編だったりする

如何なる理由があろうとも大量殺戮には異議を唱える
殺戮を容認するような神なら断じて要らない！

少なくとも僕は一人で生まれてきたから
一人で死にたい

identity

森 公宏

振り向かないで歩いていく。

明日からの自分。

今日までの自分。

時の座標を異にする自分という共通の存在。

でも、貫いているのは

時間軸じゃなくて、自分なんだ。

誕生日

森 公宏

今年も君の誕生日を忘れてしまっていて
「もう『正』が書けるくらいだよ」って
でもね

気づいてるくせに
言ってくれないってのも
どうなのかなー

君にはいつも
こんなに感謝してるのに

大体一月のこの忙しい時期に誕生日だから
忘れるのも仕方ないんじゃない？

いつも過ぎてるの気づいてから
慌てるんだよね

今年は六日後：

だからさー

もうそろそろ許してくれても
良いんじゃない？
また来年もあることだしさ

海流五十号発刊に寄せて

森 公宏

江部さんに初めて会ったのは、確か何年前の一月二日だったと記憶している。私はその時受けていたのは、『海流』という詩誌を主催している方』という情報だけだった。文筆活動などに縁の無かった自分としては、
(一体どんな方だろう?)と、正直多少の不安は抱いていた。

「やあ、初めまして。」

「初めまして。江部さんですか?」にこやかに笑って居られる人の良さそうな方というのが、第一印象だった。

「大体、詩って分かん言葉で書きすぎですよ。普通に使わん言葉使って、『これが詩や!』って感じで。そんなことやってるから、一部のマニアックな連中にしか読まれなくなる。」

「そらーそうじゃ。」国道一九六号線沿いの、オリエントエクスプレスの客車を利用した喫茶で待ち合わせをして、詩についての思いを語り合った。私自

身は江部さんの作品については、まだそんなに知らなかったが、

(この人の主催している詩誌なら、大丈夫じゃないかな…)という思いは抱いたように記憶している。

これは何も詩に限ったことではないが、『作家は自分自身の生み出した作品に責任を持つべきである』というのが、私の持論の一つである。『鑑賞者の曲解を頼りにする作品』は邪道だと思うのだ。自分が同人として、作品を掲載し始めたのは二十三号からで、竹内さんや鈴木さんらに生意気な持論を捲し立てたこともあったが、それなりに良い思い出となっている。

『海流五十号発刊』は、確かに目出度いことで、初刊より寄稿されている方々には『ご苦労様でした』という気持ちでいっぱいである。だが、私自身は、次の百号へのプロログという一つの区切りとして捉えている、今後一層の内容の充実を期待している。といっても、『箔をつけた構えた形』というのではなく、今までのように『自然体で直截的な詩誌』であり続けて欲しいと願っている。何も『詩がポピュラーになれば良い』と願っている訳ではないが、『詩がポピュラーになっても良い』とは思っている。